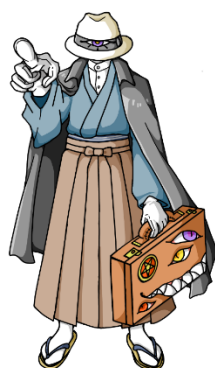
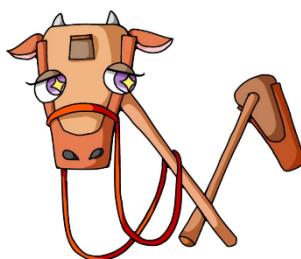
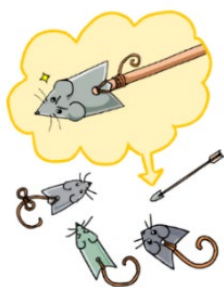


高森町歴史民俗資料館「時の駅」

つくもがみ  
「付喪神 (キャラクター) 図鑑」





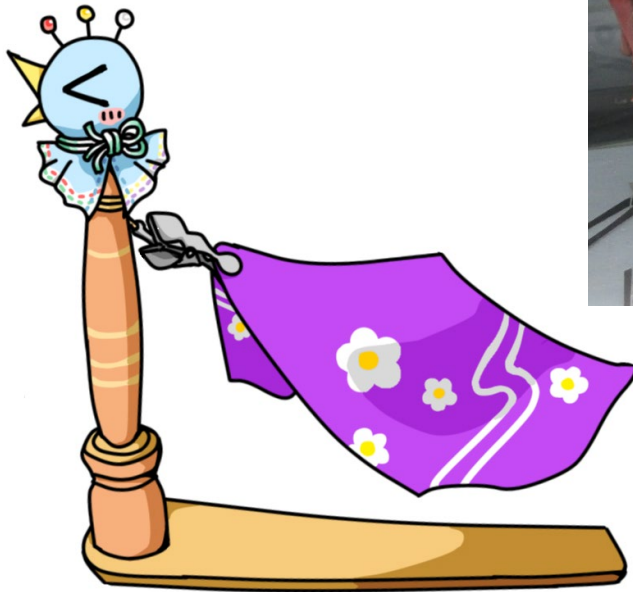
(R8. 1.12 現在)

## 「モノは百年以上たつと神になる」

当資料館には、古い民具や考古遺物がたくさん収蔵されています。中には百年以上前のモノもあります。わが国では百年以上たつとモノは「付喪神<sup>つくもがみ</sup>」という神になるといわれてきました。ケルト民族は収穫期を終えたハロウィンの日に化け物が現れるので、いたづらをされぬようお菓子などを配るとされています。わが国でも「百鬼夜行<sup>ひゃっきやこうえい</sup>絵図」中に描かれるモノたちは鬼として描かれていますが、本来は長く使われてきたモノにたいして敬意と愛着を持って「神」扱いをするのが、わが国の先人たちの知恵だったといえましょう。モッタイナイ精神でモノを大切に扱ってきたことに思いを致し、モノの役割やその価値を再認識したいと考えました。

そこで、より付喪神様に愛着を持ってもらえるように「付喪神キャラクター」を設定し、付喪神様のイメージを絵で表し、その数も増えてきましたので、「付喪神キャラクター図鑑」を作ってみました。館内のあちこちにキャラクターたちがいますので、探しながらモノたちの声に耳をすませていただけるとありがたいです。

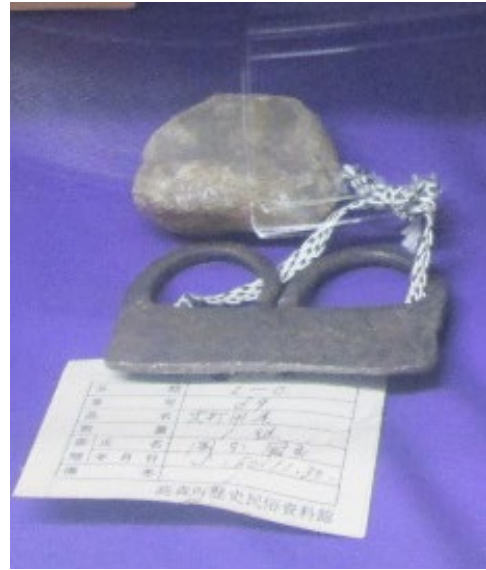




## No.19 縫台(くけだい): くけこ 通称(そのまま)「くけこ」

縫い物をするとき、縫い目を揃えて縫うのに用いる裁縫道具を「縫台」という。細長い板状の台の一端に棹を立て、棹の上に針を刺す針山をつけている。針山の少し下に通した掛糸の先につけた留め金具で布の一端を挟み、布を引いて張りながら、縫針を運んで縫う。板台は膝の下にして押さえる。立てる棹は折りたたみ式になったものと、差し込み式があり、針箱に差し立てるものもある。

当館の「くけこ」は、針山の針が鶏の鶏冠に見えることから、「くけこ」と名付けられた。留め金具にはさまれる布によって着飾るのが好きで、好みに合わない布がはさまれると針を刺して意地悪をすることもある。



## No.20 <sup>ひうちいし</sup>火打石・<sup>ひうちがね</sup>火打金：<sup>はっかほう</sup>発火坊「<sup>かんかん</sup>侃々」 通称（そのまま）「かんかん」

火打石と火打金は、双方を打ちあわせて火花を出す発火具である。

出土品から、古墳時代にはすでに使われていたことが知られており、室町時代には木片に火打金を打ち付けたものが商品として普及し、江戸時代にはさまざまな形のものが売られていた。これで得た火花を<sup>きくず</sup>木屑や木の皮などを用いた<sup>ほくち</sup>火口に取り、<sup>つけぎ</sup>付木に移して<sup>ひだね</sup>火種とした。

発火坊「<sup>かんかん</sup>侃々」は、<sup>ごうちよく</sup>剛直な性格で曲がったことが<sup>きら</sup>嫌いな坊さん付喪神である。<sup>りくつ</sup>理屈に合わないことを見聞きするとカンカンに<sup>おこ</sup>怒り、石頭を火打金にたたきつけてもぐさのひげに火をつける。相手が<sup>だれ</sup>誰であろうと<sup>ぎろん</sup>議論を<sup>ふ</sup>吹っ<sup>かけ</sup>掛けるので<sup>けむ</sup>煙たがられるが、根は<sup>やさ</sup>優しい<sup>じい</sup>爺さんである。



## No.21 すざく 朱雀：かじせん 華耳仙 通称（そのまま）「かじせん」

武<sup>ぶ</sup>陵<sup>りょう</sup>地<sup>ち</sup>Ⅱ遺跡の発掘に伴い土中より現れた付喪神である。本来は縄文人の耳を飾るイヤリングとして活躍したが、廃棄され土中で眠る間に湯が洞の温泉エネルギーを吸収し、南方を守る朱雀神として出現した。基調色の朱色は耳飾に時折見られる顔料による。

羽に付随する耳飾には、様々なデザインがあるが、百瀬長秀氏により整理分類され最盛期の古相から末期的様相まで万遍なくそろっているとされた。報告書の刊行を切望されたが、いまだ緒についてはいない。

不死鳥のごときエネルギーにあふれてはいるが、その放出先を探しあぐねている。

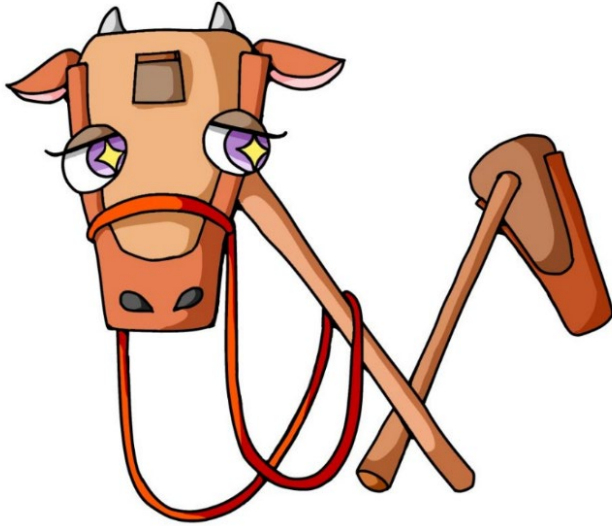


No.22 <sup>かみちょうちん</sup>神提灯：<sup>みょうちん</sup>妙珍 通称（そのまま）「みょうちん」

お化けの世界では、スタンダードな提灯ではあるが、付喪神の中でも“明るい神様”として有名である。<sup>ひぶくろ</sup>火袋の中に<sup>ろうそく</sup>蠟燭を立て、<sup>しんしゆくじざい</sup>伸縮自在に折りたためる持ち歩き用の灯火具の神様である。

提灯は日本独自に発達したもので、古くは「桃灯」と書いた。室町時代にはその祖形ともいえる、竹かごに紙をはり<sup>まつやにろうそく</sup>松脂蠟燭を立てた「<sup>かごちょうちん</sup>籠提灯」が使われていた。やがて竹ひごをらせん状に巻いて骨とし、紙をはって上下に<sup>くるわ</sup>曲輪をつけた伸縮自在の提灯が作られ、江戸時代になると和ろうそくの生産が確立されたこともあり、様々な形の提灯が広く一般に普及し、仲間も増えた。

当館の付喪神「妙珍」は、第2展示室の「照明用具」のコーナーに<sup>ちんぎ</sup>鎮座するが、<sup>たかはりちょうちん</sup>高張提灯や小田原提灯、ぶら提灯を仲間到时々ぼーと光って見学客を驚かすので、「ナイトミュージアム」で横切る時は、注意した方がよい。



## No.23 鍬牛くわうし 通称「ぎゅうちゃん」

牛馬による犁耕りこう（「すき」による耕作こうさく）が普及してからも、牛馬を入れられない湿地しつち地帯では、鍬くわによる耕作が行われた。この作業には適した形の備中鍬びっちゅうぐわや風呂鍬ふろぐわを用いた。

現在の農業は機械化され、トラクターなどを中心に行われるが、田の畝うねを立てたり、学校の花壇かだんや畑地はたがを耕す時に鍬が使われることもある。

鍬牛（ぎゅうちゃん）は、あまり使われなくなり資料館に陳列ちんれつされた鍬・鋤すきたちの中から生まれた付喪神である。

祖先の登場は農耕のうこうが本格的に行われた弥生時代やよい（約2000年前）にさかのぼるが、古墳時代こふん（4世紀～）に現れた風呂鍬や江戸時代中頃（19世紀～）に普及した備中鍬などと共にかつての「栄光」を語り合っているのだろうか。



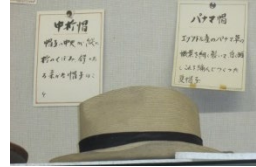
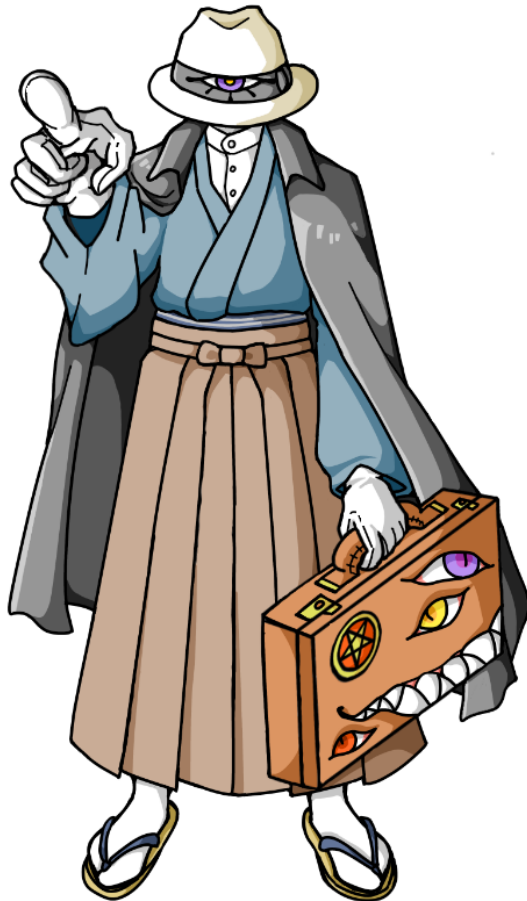
## No.24 怪盗クロック 通称「クロック」

そもそもは、時を測る器機である。日本に西洋の機械時計がもたらされたのは、天文20年(1551)スペインの宣教師フランシスコ・ザビエルによってと言われる。やがてその技術が近畿地方に伝わり、日本の時刻制度に合わせた独特の和時計が考案された。日本の和時計は1年中1時間の長さが同じモノではなく、四季の変化によって変える不定時法に則して時を刻むようにしたもので、時刻盤も十二支が表示されていた(0時が子)。

当館の和時計から生まれた怪盗クロックは、時を自由に操り、他の時計に変身して人の心を盗む怪盗である。ナイトミュージアムに参加した子どもたちはご用心! 天敵はパナマ帽

がトレードマークの<sup>ときやこころう</sup>時屋小五郎である。

-24-



## No.25 <sup>ときやこころう</sup>時屋小五郎

通称「小五郎」

資料館第2展示室の衣装コーナーから生まれた付喪神である。「怪盗クロック」の悪事を制するべく、第2展示室の入り口側で待機する。

トレードマークの「パナマ帽」の下顔は誰も見たことが無く、小五郎そのものが謎の付喪神であるが、「怪盗クロック」が起こす悪事を止めようという想いは本物である。

衣服は、明治から大正期にかけて流行した服装で、被る「パナマ帽」は、夏目漱石や森鷗外、北原白秋など多数の文学や詩、果ては作者の手紙にも登場する。特に夏目漱石は、「猫（吾輩は猫である）」を書いた原稿料をもらったので、さっそくパナマ帽を買って大得意で

被っていたら…」という手紙を書いているほどで、当時の人気がうかがえる。

携帯するトランクには怪盗クロックの悪事を阻む道具が詰まっている。

-25-



## No.26 さおばかりざる 竿秤 猿

通称「天ちゃん」

竿秤とは物の重さを量る「はかり」である。天から伸びる鬼の手（天の鬼の手）に握られた竿秤にぶら下がるのは、おもり 鍾（ぶんどう 分銅）の付喪神猿「天ちゃん」である。鬼の手に握られたひもを支点として、先端の皿に量るものを、他の側に鍾の分銅を吊り下げ、鍾を移動させて水平を保つ位置の目盛りを読む。

高森名産の果物などを皿に入れ、その重さや価値をバランスを取りながらはかるのが得意である。「天ちゃん」は高森の未来を予測する能力も秘めている。

牛牧と大島山の境に「鬼の手公園」「鬼の手大橋」があるが、天の鬼の手との関係は不明である。

